酒田・飽海大豆情報

第３号
令和4年7月12日

酒田農業技術普及課
TEL　22－6521
FAX　22－6522

生育は順調です！

大型化する雑草は今のうちに抜き取りましょう！

Ⅰ　生育は順調

【管内の品種別開花期(平年)】

品種	開花期
リュウホウ	7月26日頃
エンレイ	7月28日頃
里のほほえみ	8月1日頃

降雨による播種の遅れにより圃場間差はありますが、全般に順調に生育しています。また、梅雨による１回目の中耕培土の遅れで、雑草の発生も認められます。速やかに中耕培土に入り高品質大豆の安定多収を目指しましょう。

また、右表を参考に、病害虫防除の適期判定に必要な開花期を把握しておいてください。開花期は圃場全体の 40～50%の株が開花した時です。

Ⅱ　培土期追肥の検討・実施

すでに６～７葉期に達している圃場もあり、２回目の培土時期を迎えています。これより遅れている圃場でも、６葉期になったら遅れずに培土を実施することが大切です。仕上げ培土なので、初生葉の付け根までゆっくり丁寧に土を盛るようにしてください。

また、生育量が十分でない圃場では、培土作業の直前に追肥を行うことが生育量増大に効果的です。排水不良が原因の場合は、排水対策を徹底した上で実施してください。

（例）「ＬＰコート７０」（緩効性）を２０kg（Ｎ成分８kg）/１０a、または「尿素」（速効性）を９kg（Ｎ成分４kg）/１０a 全面散布し、その後培土を実施します。

Ⅲ　子実病害虫防除の徹底

薬剤散布時期の判断には、開花期の把握が必要です。

「紫斑病」：防除適期は開花後 25～35 日の間、薬剤は「莢」まで付着するよう丁寧に散布します。

「ﾏﾒｼﾝｸｲｶﾞ」：１回目を、8 月 25 日頃に紫斑病と同時防除を実施すると効率的です。さらに、その 10 日後（9 月 5 日頃）に２回目の防除を実施します。

対象病害虫	防除時期	
紫斑病	開花後25～35日頃	
マメシンクイガ	①8月25日頃(産卵盛期)	②1回目の10日後

紫斑粒

マメシンクイガ成虫

マメシンクイガの被害莢・子実

Ⅳ アブラムシ類の吸汁害や食葉性害虫の被害

【吸汁性害虫】

ジャガイモヒゲナガアブラムシは、８月以降急激に増加することがあるので、注意して観察し、発生・被害が見られたら発生初期の被害が拡大する前に、薬剤を葉裏にもかかるよう丁寧に散布します。

【食葉性害虫】ハスモンヨトウの被害に注意！

ハスモンヨトウの幼虫

ハスモンヨトウの卵塊

本年はハスモンヨトウの発生数が多いと見込まれ、幼虫による被害の発生が懸念されます。幼虫の齢期が進むと防除効果が低下するため、若齢幼虫期に薬液が葉裏までかかるようていねいに散布します。そのほかにもツメクサガ、マメハンミョウなどは、初め圃場の一部分を集中的に食害する傾向があるので、発生を確認したら周囲に広がる前に部分的な薬剤散布を実施することも効果的です。

Ⅴ これからの雑草対策

タデ類、オナモミ、シロザ等の大型化する雑草は今のうちに抜き取りましょう。また、一部圃場に帰化アサガオ類の発生が見られます。圃場を見廻り、数が少ないうちに抜き取りましょう。特に、実(種)が付く前に抜き取ることで、来年以降の発生を減らすことができます。早めに抜き取り、草との競合を無くすことで大豆の生育が促進され、さらに収穫時の余計な手間を省くことができます。

除草剤を使用する場合はラベルの適用をよく読んで使用してください。湿害による根傷みや、高温（乾燥）が続く場合は薬害が発生する恐れがあります。

夏は熱中症に注意　定期的に水分と休憩を取りましょう

- ☑ 作業は涼しい時間帯に
- ☑ 塩分と水分をこまめに補給
- ☑ 定期的に休憩を
- ☑ 作業は涼しい服装で